

2007 年 7 月 21 日

第 4 回フロイトを読む会

『モーセという男と一神教』(1939 年)

木村祐治(関西大学大学院法学研究科)

特に明記しないかぎり、ページは『フロイト全集』第 22 巻のものを示している。

聖書からの引用は、すべて『聖書 新共同訳』共同訳聖書実行委員会・訳、日本聖書教会、1987-1988 年から行なった。

内容

「モーセがエジプト人であったという説から、モーセの一神教がエジプトの王イクナトンのアトン教を継承するものであること、ユダヤ人は神に選ばれたのではなく、その一神教を信仰させるためにモーセによって選ばれた民であったこと、モーセが反乱によって殺され、その悔恨から後のユダヤ教が生まれたことなど、こんなにおもしろくていいのかというくらい、次々と新説が繰り出される。これはもう怪しげなトンデモ本すれすれ、というか、完全にトンデモ本の中に飛び込んでしまったようで、おもしろいけれども、どうにも扱いようがなく、そのまま放り出すしかなかった。」
(末木文美士「宗教史とその深層」『フロイト全集 月報 4』第 22 巻)

「……モーセが一人の高貴なエジプト人であったという想定を真実だと思う気持ちが生じるならば、その場合、たいへんに興味深く、かつ広大なパースペクティヴが現われる……モーセを尋常ならざる歩みへと導いた動機が理解されるであろうし、その動機との緊密な関係とのなかで、モーセがユダヤの民に授けた掟と宗教に関する数多くの特質および特異性を根拠づけることが可能となろう。さらに、一神教一般の成立についての意義深い見解すらも提起されるだろう。」(14 ページ)

モーセ、ひとりのエジプト人

「ある民族の子孫たちが彼らにとって最大の存在と見なし、誇りに思っている人間に対して不遜な論難を加えるなどということは決して好きこのんで、あるいは軽率に企てられるべきでない。とりわけ、自身がその民族に属している場合は、なおさらであろう。しかしながら、いわゆる民族的利益のために真理をないがしろにすることは、どのような先例があるにせよ、避けるべきである。さらに、事態の解明によって、われわれの認識の深化に役に立つ収穫が実際に期待されてもよい。」(3 ページ)

1 “モーセ”という名前

- エジプトの王女がなぜヘブライ語に由来する名前をつけたのか？
- こどもは本当にナイル川から引き上げられた？

2 「英雄誕生の神話」

0. ランク

高貴な両親のもとに生まれる→父の指示で棄てられる(箱に入れられ、水に流される)
→身分の低い人に救われ、育てられる→成人し、実の両親に再会・父に復讐→真の素性を認められ、権力と栄光を得る

- モーセの例との矛盾＝生まれと育ちの逆転
慎ましやかな家庭に生まれ、王家で育つ
→“英雄モーセ”像を確立するため、遺棄伝説が持ちこまれた？

「モーセはひとりの——おそらくは高貴な——エジプト人であり、伝説によってユダヤ人へと変造されるべく運命づけられていたのだ」(13 ページ)

もしもモーセがひとりのエジプト人であったとするならば……

「もしもモーセがひとりのエジプト人であったとするならば、そしてもしも彼がユダヤ人に彼自身の宗教を伝えたとするならば、それはイクナートンの宗教、すなわちアトン教であった」(26 ページ)

1 たった一人の人間が簡単に新しい宗教を創り出せる？

- 「誰かが他人の宗教に影響を与えようとするとき、その人が他人をその人自身の宗教に改宗させるのが最も自然な経緯ではあるまいか。」(18 ページ)
- エジプト人モーセが、ユダヤ民族にエジプトの宗教を与えた？

2 ユダヤ教＝一神教 エジプトの宗教＝多神教だが……

→一神教アトン教

- 神話的・魔術的・呪術的なものの排斥
「女呪術師を生かしておいてはならない。」(「出エジプト記」22.17)
「占いや呪術を行なってはならない。」(「レビ記」19.26)
「霊媒を訪れたり、口寄せを訪ねたりして、汚れを受けてはならない。」(「レビ記」19.31)

○無味乾燥な太陽神の表現

平たい円盤... × アトンの人格の造形

「あなたはいかなる像も造ってはならない。……いかなるものの形も造ってはならない。あなたはそれらに向かってひれ伏したり、それらに仕えたりしてはならない。」(「出エジプト記」20.4-20.5)

「あなたたちは偶像を造ってはならない。」(「レビ記」26.1)

○死の神オシリスと死の国に対する沈黙

「われわれは当然のことながら、ユダヤ教が彼岸および死後の生命について何事をもいっさい知ろうと欲していないことを不思議に思っていた。……けれども、ユダヤ教からアトン教へと溯り、彼岸および死後の生命に関する教えに対する拒絶的な態度はアトン教からユダヤ教へと伝えられたのだと考えるならば、われわれの抱く不可思議の念は消える。すなわち、イクナートンにとっては、この世のいかなる神よりも大きな役割を果たしていたであろう死の神オシリスが君臨するエジプト民衆宗教との闘争に際して、彼岸および死後の生命に関する教えを拒絶することはどうしても必要だったのだ。」(28-29 ページ)

3 割礼の由来

「割礼という慣習はどこからユダヤ人のなかにやってきたのか、との問いにはただひとつの答えしかあり得ず、この事実は動かせない。すなわち、エジプトからである。」(29-30 ページ)

「モーセがユダヤ人に一つの新しい宗教だけでなく割礼という掟をも与えたのであれば、彼は決してユダヤ人であったのではなく、ひとりのエジプト人であったのだ……そうであれば、モーセの宗教はおそらくエジプトの宗教、しかもエジプト民衆宗教との対立からして、のちのユダヤ教といくつかの注目すべき点で一致を示しているアトンの宗教であったことになるだろう。」(31 ページ)

→ “聖別された民” としてのユダヤ人

4 “口下手なモーセ” というエピソードが示唆するのは……

「ああ、主よ。わたしはもともと弁が立つ方ではありません。あなたが僕にお言葉をかけてくださった今でもやはりそうです。全くわたしは口が重く、舌の重い者なのです。……主はついに、モーセに向かって怒りを発して言われた。

「あなたにはレビ人^{びと}アロンという兄弟がいるではないか。わたしは彼が雄弁なことを知っている。……彼によく話し、語るべき言葉を彼の口に託すがよい。わたしはあなたの口と共にあり、また彼の口と共にあって、あなたたちのなすべきことを教えよう。彼はあなたに代わって民に語る。彼はあなたの口となり、あなたは彼に対して神の代わりとなる。」(「出エジプト記」4.10-4.16)

「この記録は、モーセがユダヤ人とは言語を異にする人物であって、彼に従ったセム系の新エジプト人とは、少なくともはじめの頃は通訳なしでは交流しえなかったという事実を、軽く歪曲して物語っているのかもしれない。それゆえ、これはわれわれの主張する命題の正しさを裏づける。モーセはひとりのエジプト人であった、ということ。」(38-39 ページ)

5 モーセ殺害→モーセ教放棄の記憶

○エジプトから戻ってきた部族

エジプトとカナンのあいだの地域で、別の部族と一体化→イスラエル民族
ヤハウェ教の受容

○レビ族...モーセ配下のひとびと

「レビ族のみは、イスラエルの人人とともに登録したり、その人口調査をしたりしてはならない。むしろ、レビ人には掟の幕屋、その祭具および他の付属品にかかわる任務を与え、幕屋とすべての祭具の運搬と管理をさせ、幕屋の周囲に宿営させなさい。移動する際には、レビ人が幕屋を畳み、宿営する際にはレビ人がそれを組み立てる。それ以外の者が幕屋に近づくなれば、死刑に処せられる。」(「民数記」1.49-51)

「エジプト人モーセのような身分の高い男が、部下を伴わずに単身で異民族のところに赴いたなどという話は信じられない。彼は、間違いなく、彼の従者を、彼の側近の信奉者を、彼の書記を、彼の召使いを伴っていたはずである。そして、この者たちは元来レビ人だったのだ。.....このモーセ配下の人びとのうちかなりの数の者が、モーセとその宗教創設を襲った破局を免れたと考えてよかろう。この人びとは続く数世代のうちに増えて行き、彼らがともに生活していた民族と融合したけれども、彼らはその主人モーセには忠実であり続け、モーセへの追憶の念を抱き続け、そしてモーセの教えの伝統を育んだ。ヤハウェを信仰する人びとと一体化した頃、このレビ人たちは影響力の大きな、他民族に文化的にまさる少数派を形成していた。」(46-47 ページ)

→割礼の保持

○出エジプトについての記憶

ヤハウェの導き モーセの導き

→モーセへの負い目→モーセをミディアンの祭司であったことに

モーセ殺害の否認の意味も

「人びとがモーセ殺害について悔恨の念に満たされ、この犯行を忘れようと努めるときがやってきた。.....エジプト脱出をオアシスにおける宗教創設に近づけ、ほかならぬモーセその人を宗教創設に関与させる処理によって、モーセ配下の民の要求が満たされたばかりでなく、モーセを暴力でもって片付けてしまったという不快で苦々しい事実も、またきちんと否認される結果になった。」

6 神がユダヤ民族を選んだ？モーセがユダヤ民族を選んだ？

○神と民族の不可分

「ある民族がそれまでとは別の神を受け容れるという話は、実際のところ稀ではないが、しかしある神がそれまでとは別の民族を選択するなどという話は聞いたことがない。モーセとユダヤ民族のあいだの関係をしっかりと思い起こすならば、われわれは、この類を見ない出来事を理解するようになるだろう。モーセこそがユダヤの民のなかに身を落とし、彼らをモーセの民族としたのだ。ユダヤ民族は、モーセによって「選ばれた民族」だったのだ。」(56 ページ)

7 伝承の力

○モーセについての記憶の伝承

「ヤハウェ神の背後に、忘却されたはずのモーセの神が現われてきた。ヤハウェとは別のこの神の理念のみが、イスラエルの民にあらゆる運命の痛撃に耐えさせ、この民にわれわれの時代まで生き抜く力を与えてくれたことを疑う者など一人もいない。」(63-64 ページ)

「伝承なるものの本来の正体はどこに存するのか、伝承なるものの独特の力はどこに基づいているのか、世界史に対する個々の偉大な男たちの個性的な影響力を否定することがいかに不可能であるか、物質的欲求からの動機だけが承認された場合、人間の生活の大いなる多様性に対して、いかなる犯罪的所行がなされる結果となるか、いかなる源泉から人間や諸民族を征服するような力を、多くの、とりわけ宗教的な理念は汲み取るのであるか—これらすべての問題をユダヤの歴史という特殊事例に則して研究するのは、魅惑的な課題であろう。」(66 ページ)

1 旧約聖書

第 1 部 律法（トーラー）

第 2 部 預言者（ネービーイーム）

第 3 部 諸書（ケトゥービーム）

“モーセ五書” = 創世記 出エジプト記 レビ記 民数記 申命記

→ 神の救済の歴史

ヨシュア記を加えてモーセ六書とされることも

(川村^{あきのり}輝典『聖書』キリスト教入門 1 日本基督教団出版局、1977 年、43 ページ、57 ページ)

2 モーセの生い立ち

○ 水から引き上げられる

ファラオは全国民に命じた。「生まれた男の子は、一人残らずナイル川にほうり込め。女の子は皆、生かしておけ。」

レビの家の出のある男が同じレビ人の娘をめとった。彼女は身ごもり、男の子を産んだが、その子がかわいかったのを見て、三か月の間隠しておいた。しかし、もはや隠しきれなくなったので、パピルスの籠を用意し、アスファルトとピッチで防水し、その中に男の子を入れ、ナイル河畔の葦の茂みの間に置いた。

その子の姉が遠くに立って、どうなることかとうすを見てみると、そこへ、ファラオの王女が水浴びをしようと川に下りて来た。その間侍女たちは川岸を行き来していた。王女は、葦の茂みの間に籠を見つけたので、仕え女をやって取って来させた。開けてみると赤ん坊があり、しかも男の子で、泣いていた。王女はふびんに思い、「これは、きっと、ヘブライ人の子です」と言った。そのとき、その子の姉がファラオの王女に申し出た。「この子に乳を飲ませるヘブライ人の乳母を呼んで参りましょうか。」

「そうしておくれ」と、王女が頼んだので、娘は早速その子の母を連れてきた。王女が、「この子を連れて行って、わたしに代わって乳を飲ませておやり。手当てはわたしが出しますから。」と言ったので、母親はその子を引取って乳を飲ませ、その子が大きくなると、王女のもとへ連れて行った。その子はこうして、王女の子となった。王女は彼をモーセと名付けて言った。「水の中からわたしが引き上げた（マーシャー）のですから。」（「出エジプト記」1.1-2.10）

↓

○ ヘブライ人を打擲していたエジプト人を殺害

モーセが成人したころのこと、彼は同胞のところへ出て行き、彼らが重労働に服しているのを見た。モーセは辺りを見回し、だれもいないのを確かめると、そのエジプト人を撃ち殺して死体を砂に埋めた。（「出エジプト記」2.11-2.12）

- ↓
- ミディアン地方に逃れ、祭司の娘（ツィポラ）と結婚
 - ↓
 - 召命を受け、エジプトに戻る
 - 「わたしはエジプトにいるわたしの民の苦しみをつぶさに見、……その痛みを知った。それゆえ、わたしは降って行き、エジプト人の手から彼らを救い出し、この国から、広々としたすばらしい土地、乳と蜜の流れる土地……へ彼らを導き上る。…わたしはあなたをファラオのもとに遣わす。わが民イスラエルの人々をエジプトから連れ出すのだ。」（「出エジプト記」3.7-3.10）

3 アメンホテップ4世（在位B.C.1364-1347）の宗教改革

- 第 18 王朝（B.C.1552-1306）…新王国時代：古代エジプト最後の繁栄期
 - テーベ神官団の勢力拡張…主神アモン
 - 「トトメス 3 世（在位 B.C.1490-1436）以降のエジプトの発展は、アモンの守護による！」
 - ↓
 - 祭祀を司る神官たちの地位向上
神殿、戦利品、貢租、土地の寄進
 - ↓
 - 宗教的権威を背景に、王位継承や政策に干渉……神官団 王権
トトメス 4 世（在位 B.C.1412-1402）アメンホテップ 3 世（在位 B.C.1402-1364）との対立
 - アメンホテップ 4 世即位
 - 神官団の影響排除、ファラオ専制体制の確立を目指し、世界史上初の組織的宗教改革
 - 太陽神アトン以外の崇拝禁止
 - 世界初の排他的一神教
 - 新首都アケタートン（“アトンの地平線”）建設・遷都
 - 自身の改名 イクナートン（“アトンの意に適う者”）
 - ヤハウエー神教へ？（フロイト）
 - 直接的関係はほぼ否定されている
 - 宗教改革への傾倒 外政への無関心
 - 都市国家間抗争、他民族の侵入を招く
 - 娘婿ツタンカーメン（“アモンの生ける姿”）
 - 神官団の復権
- （山我哲雄、佐藤研『旧約新約聖書時代史』教文館、1992 年、25-33 ページ）

4 割礼

神はまた、アブラハムに言われた。

「だからあなたも、わたしの契約を守りなさい。あなたも後に続く子孫も。あなたたち、およびあなたの後に続く子孫と、わたしとの間で守るべき契約はこれである。すなわち、あなたたちの男子はすべて、割礼を受ける。包皮の部分を切り取りなさい。これが、わたしとあなたたちとの間の契約のしるしとなる。いつの時代でも、あなたたちの男子はすべて、直系の子孫はもちろんのこと、家で生まれた奴隷も、外国人から買い取った奴隷でああなたの子孫でない者も皆、生まれてから八日目に割礼を受けなければならない。あなたの家で生まれた奴隷も、買い取った奴隷も、必ず割礼を受けなければならない。それによって、わたしの契約はあなたの体に記されて永遠の契約となる。包皮の部分を切り取らない無割礼の男がいたなら、その人は民の間から断たれる。わたしの契約を破ったからである。」(「創世記」17.9-17.14)

○割礼放棄の試みがあったことを示唆？(54 ページ)

途中、あるところに泊まったとき、主はモーセと出会い、彼を殺そうとされた。ツイボラは、とっさに石刀を手にして息子の包皮を切り取り、それをモーセの両足に付け、「わたしにとって、あなたは血の花婿です」と叫んだので、主は彼を放された。彼女は、そのとき、割礼のゆえに「血の花婿」と言ったのである。」(「出エジプト記」4.24-4.26)